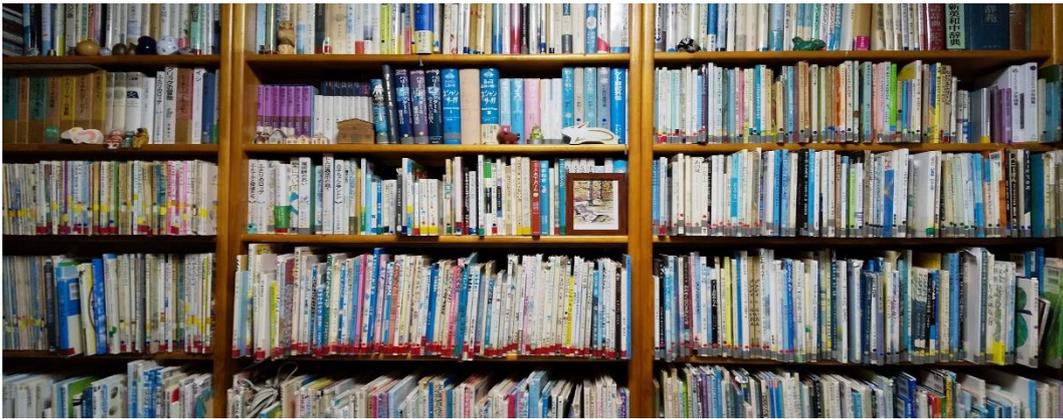


けふばあちゃんからの手紙

—その1— あなたへ

じゃりんこ文庫 乾 京子



2024年元旦、お正月のお祝いの後、自宅へ帰っていく長男家族を見送って、うつらうつらしている時にグラグラッ、ゆらゆら。「地震だ！地震だぞ！！どこだ？」どたどたと夫が二階から下りてきてテレビをつけました。

「能登で震度7の地震。津波が来ます、逃げてください！命を守る行動をしてください！逃げてください！津波が来ます！！」

大変な幕開けとなってしまいました。そろそろ一か月が経とうとしています。落ち着いてきてからの能登の皆さんの日常を思うと、また心が痛みます。

お元気ですか？改めてちいさな日常のありがたさを思っています。そして、それも危ういものなのだということも、だからこそ日々大切にしたいものだとも思っています。

あっ、ごめんなさい。初めてのお便利になります。1994年4月から「じゃりんこ文庫」という家庭文庫を自宅を開いています。毎週木曜日、近所の子もたちやその知り合い、お母さんと一緒にやってきましたり、子どもたちだけでやってきましたりしています。折り紙や工作、新聞紙でちゃんばらもあります。おはなしおばちゃんのストーリーテリングを聞いたり、けふばあちゃんの絵本の読み聞かせもあって、帰りに思い思い数冊の絵本や児童書を抱えて帰っていきます。

そんないつものふつう文庫。春には近くの相模川源流への遠足や夏休みのかがくあそび、クリスマスお楽しみ会、コンサートや人形劇、石川の水野スウさんにも来ていただいたり、松本のちいおばさんの人形劇、お琴やアイリッシュハープのコンサートなどの特別な日の「おたのしみ会」。まあ、30年の間には、いろんなことがあったり、いろんな子どもたちもいて、小さな事件もありました。

300冊ほどの自前の本から始まって、今では3000冊くらいの絵本に児童書。大人向けの本も少々。そんな本たちと子どもたちとおとなたち、わいわいがやがや、どってん、ぼったんと賑やかだった「じゃりんこ文庫」も今は、数組の親子さんと小学生数人がやってきます。以前のことを思えば静かなものです。以前は、男の子の取っ組み合いにも負けないほどの元気もあつたけふばあちゃんも最近では、「ヨッコラショ。おばちゃんもおばあさんになってきて、すぐには動けないがねえ」と言えば、4年生の女の子が「けふばあちゃん！ だけど、おばあさんじゃないよ。文庫まだ辞めたらあかんよ。わたし、たのしみなんだもん。行くところなくなるもん。けふばあちゃん、元気でいてよ！」と。

「まあ、うれしいこと。もうちょっと元気でいなあかなあ。」

「黒い画用紙とピンクの画用紙ある？」「はさみと…セロテープと…」

勝手知ったるなんとやら、文房具入れから鋏を出して、テレビの後ろからセロテープも持ってきて、チヨキチヨキ、……「あっ、そうだ。輪ゴムもほしいなあ」

「けふばあちゃん、見て！ こんなのできた。」、ヘアバンド風猫の耳。ズボンに挟んだピンクのリボンをつけた猫のしっぽ。腕を丸めて、「ニャ〜ン！」

この子の横で、もくもくと手を動かしていたTちゃんは、「パチンコだよ。手裏剣もできた！！」

「あっ、5時半だ。帰らなくちゃ。この本、借りてくね。カード、書いといたよ。」

「私、今日は6時までいいって、ママが言ったよ。もう少しいい？」

30年経った「じゃりんこ文庫」の現在の日常です。その日、その日の記録の日記も、No.13になりました。ところどころに写真やお楽しみ会のチラシも挟まれています。パラパラッとめくっていたら、なつかしい子どもたちの顔が浮かんできました。（おおきくなっただろうなあ、どうしているかなあ）

（そうだ！ お手紙を書いてみよう！！）

こうして『けふばあちゃんからの手紙』を始めたいと思います。次回は、まず、はるこちゃんから。来週もきっと抱っこ紐に三番目の子を抱えて、二人の子どもの手を引いてやってくることでしょう。

*「じゃりんこ文庫」日記から、出来事は拾います。でも、名前は皆、私の考えた偽名です。

↓「どうぞおはいらください」 ↓ふつつ文庫



↓宿題やったり、読み聞かせしたりの
ふつつ文庫



じゃりんこ文庫日記と
「じゃりんこ通信」→

